

ジュネーブ「国際機関地区」を 紐解く

都市環境学専攻専攻 博士後期課程2年 中村 茉生さん Nakamura Maiki



中村さん

スイス、ジュネーブ。レマン湖のほとり、起伏に富んだ丘陵地に、WHO（世界保健機関）、WTO（世界貿易機関）など40以上の国際機関が集まる「国際機関地区」があります。中村さんは、この地区において、1920年から1964年の間に国際連盟・国際連合によって計画された建築・都市について形態分析を行い、その空間的特質を明らかにしようと博士論文に取り組んでいます。きっかけは学部4年生の頃。コロナ禍でWHO本部で会見するテドロス事務局長の映像が頻繁に流れ、「この建物どうなってる?」と興味を持ったこと。このささやかな好奇心が卒業論文から今へとつながる研究テーマとなったのです。

卒論で取り上げたのは、1966年に建設されたWHO本部。日本人建築家、丹下健三を含む15人の設計競技を経て、スイスのモダニズム建築を代表する建築家、ジャン・

チュミが設計。15人の案を比較しながら建物を分析すると同時に、敷地の周辺環境に着目。地形に対する建築の作り方がかなり特徴的だと考察しました。それを端緒に、パレ・デ・ナシオン（国連欧州本部）、国連広場、ILO本部など対象を増やしながら、個々ではなく、まとまりとしての地区に関心を広げていきました。そうした中で見えてきたのは、建築と自然が調和し合って持続的な開発の道をたどってきたこと。「マスタープランがあって計画された官庁街ではないんです。法律じゃなくて、地形や自然、最低限の制約を尊重して建築家が上手く敷地を読んでそれぞれの巨大な建物が成立している。そこが一番この地区に惹かれるところです」。

苦労したのは資料収集。実際に踏査調査を行い、WHO本部やスイスの図書館に問い合わせたり、建築家の作品集を探したり。そうやって一つひとつ紐解いた国際機関地区の在りようは、自然に中に、建築はどうあるべきかを教えてくれています。

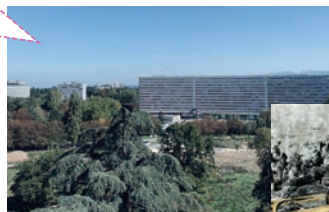


WHO本部

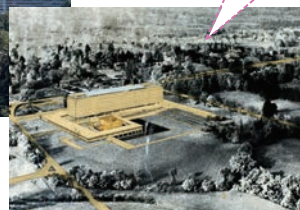
アーカイブスでの調査



緑豊かな
国際機関地区



WHO本部の図面



編集後記 ● 本号では、「自然と都市をつなぐ物質循環の未来—廃棄物から価値へ—」をテーマに、環境学研究科が掲げる地球規模課題の一つである「資源・物質循環」に焦点を当てました。「エコラボートーク」では、自然環境と都市環境の視点から資源の有効活用と物質循環の可能性について議論しました。「環境学の未来予測」では、二酸化炭素の回収・利用（CCU）、生態系における蟲（昆虫）の役割、そして資源循環におけるデータ・ガバナンスの重要性について、多様な視点から論じています。また「授業拝見」では、マイクラフトを活用した仮想空間でのSDGs都市構想の授業を紹介し、「名大くんが行く」では、博士後期課程の中村茉生さんがスイス・ジュネーブの国際機関地区を巡り、都市環境の視点から考察した内容をお届けします。

本号が、資源循環や持続可能な都市のあり方について考えるきっかけとなれば幸いです。（李 時桓 Sihwan Lee）

環 KWAN

vol.48 2025年3月

名古屋大学大学院
環境学研究科

【環・48号 広報委員会】

李 時桓（環48号編集委員長）

山崎 敦子（広報委員長）

後藤 佑介

齋藤 輝幸

三上 直之

増沢 陽子

谷川 寛樹

編集／編集企画室 群

デザイン／オフィスYR